



限界效用説ノ基本的誤謬

河上, 肇

(Citation)

經濟學商業學國民經濟雜誌, 12(1):57-108

(Issue Date)

1912-01

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/00051817>



限界效用說ノ根本的誤謬

京都法科大學助教授

法學士 河上肇

目次

- 一、序言
- 二、所謂限界效用說ノ要旨
- 三、所謂限界效用說ノ誤謬
- 四、重子テ其ノ誤謬ヲ明カニス
- 五、斯カル謬見ヲ生ズルニ至リタル第一原因——主觀的ノ價值ト客觀的ノ價值トノ混同
- 六、其ノ第二原因——個人ニ對スル供給量ト天下ノ供給量トノ混同
- 七、其ノ第三原因——效用遞減說ニ所謂消極效用ナル觀念ノ誤謬タルコト
- 八、價值決定ノ真相——吾人ノ主張
- 九、吾人ノ主張ノ要領
- 一〇、所謂限界效用說ノ廣ク行ハレツ、アル二三ノ實例
- 一一、メンガー及セボンスノ說ハ如何

一 序 言

茲ニ所謂限界效用說ナルモノハ、多クノ學者ガ認メテ以テ其ノ著書中ニ明記シ居レル一學說ナルガ、余ノ今マ公ニセントスル所ノ此ノ一論ハ、斯カル學說ノ根本

的ニ誤謬ナルコトヲ明白ニセルモノニテ、自ラハ見テ以テ學界ノ一小發見ト爲ス。仍テ此ノ小論ノ由來ヲ先ヅ明記シ置カンニ、稿者ハ其ノ奉職セル大學ノ同僚及ビ學生ト共ニ、茲ニ所謂限界效用說ニ就キ、數回ノ研究會ニ於テ屢々討論ニ從事シ、其間ニ於テ本論ニ述ブルガ如キ思想ヲ練出スニ至リシモノナレバ、若シ此ノ論中何等カ採ルベキノ創見アラバ、ソハ是等ノ先輩及ビ學生諸君ノ賜ニシテ、殊ニ、法學士瀧正雄君及ビ馬場由雄君ハ、始メヨリ余ト同ジ傾向ノ思想ヲ有セラレ、以下本論ニ述ブル所ノ要點ニシテ、是等兩君ノ余ニ先ツテ發表セラレシ所ニ屬スルモ亦タ少カラズ、故ニ、今マ他ノ諸君ニ先チ、茲ニ其ノ研究ノ結果ヲ發表スルニ當リ、余ハ特ニ此事ヲ明記シ置クノ適當ナルヲ覺ユ。抑テ自ラハ、此論少クトモ學界ノ一小發見ト云フニ値スト信ズレド、或ハ一笑ニ附スベキ愚說タルヤモ計ルベカラズ。請フ、兎モ角モ其ノ言ハントスル所ヲ筆ニシ試ミン。

一 所謂限界效用說ノ要旨

所謂限界效用說ナルモノハ、價值決定ノ理法ノ說明ノ爲メニ、今マ廣ク學者ノ間ニ通用ス、然ルニ吾人ノ見ル所ニ依レバ、此說乃至此說ニ於ケル價格論ニハ、看過スベカラザル幾多ノ誤謬ヲ包含スルニ似タリ。而シテ吾人ハ、今後モシ機會ヲ得バ、是

等ノ誤謬ヲ逐一指摘スルコトアルベシト雖モ、茲ニハ先ヅ、一定量ノ物ノ價值ハ其ノ限界效用ニ單位數ヲ乘ジテ得タル積ニ等シト云フ說ノ、根本的ニ誤謬ナル所以ヲ論明スルニ止メント欲ス。

限界效用說ハ效用遞減說ト同ジカラズ、吾人ハ效用遞減說ニモ一大誤謬ヲ包含スト爲スモノニテ、本論ニ於イテモ行論ノ必要上少ク其點ニ觸レタル所アレドモ、是等ノコトヲ詳論スルハ元ト本論ノ目的トスル所ニ非ズ。

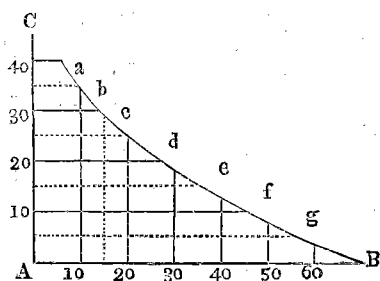
茲ニ限界效用說ト云フハ、前ニモ一言セル如ク、一定量ノ物ノ價值ハ其ノ限界效用ニ單位數ヲ乘ジタル積ニ等シト云フ說ノコト也、若シ限界效用說ヲ解シテ、一定量ノ物ノ何レカ一單位ノ價值ハ其ノ限界效用ニ依リテ定ルト云フノ說ニ止ルトセバ、ソハ何等非難スベキ點ナケレドモ、多クノ學者ハ之ヨリ一步ヲ進メテ、一定量ノ物ノ各單位ノ價值ガ一樣ニ最終單位ノ效用ニ依ツテ決定セラルト爲スガ故ニ、茲ニハ斯カル說ヲ目シテ限界效用說ト爲シ、而シテ斯カル意味ノモノガ限界效用說ナラバ、ソハ根本的ノ謬想タリト云フコトヲ論ジ試ミント欲スル也。

今マ議論ノ順序トシテ、茲ニ謂フ所ノ限界效用說ノ大要ヲ掲グレバ次ノ如シ。茲ニ掲グル一文ハフエター氏ノ『經濟原論』中ノ一節ノ大意ニシテ、余ガ近頃公ニセシ

其書ノ評釋本タル『物財ノ價值』ヨリ轉載シタルモノ也。

一定ノ財ノ分量ニシテ或ル程度以上ニ増加センカ其ノ分量ヲ増スニ從フテ、増シタル部分ノ效用ハ次第ニ遞減スルモノニテ、之ヲ名ケテ效用遞減ノ法則ト云フ。(中略)例ヘバ茲ニ酒アリトセンニ、一杯復タ一杯、杯ヲ重スルニ從フテ樂次第ニ加ハルト雖モ、ソレモ度ヲ越サバ、酒ノ味次第ニ減ジテ全ク飽滿ノ極ニ達シ、ソレヨリ以上酒ヲ勸メラル、ハ却テ苦痛不快トスルニ至ルベシ。(中略)此ノ如ク一定ノ財ノ效用ハ其ノ分量ヲ増加スルニ從フテ次第ニ減少スルモノナルガ、今マ最後ニ増加シタル一單位ノ效用ハ之ヲ名ケテ限界效用ト云フ。(中略)此ノ如ク、限界效用トハ、人ガ最後ニ増加シタル一單位ニ附スル尊重ノ程度ナルガ、今マ其ノ各單位ニシテ同カラシカ、何レノ單位ヲ喪フモ異同ナキガ故ニ、最後ノ一單位ニ對スル尊重ノ程度ハ、總テ一樣ニ凡テノ單位ニ附スル尊重ノ程度ナラザルベカラズ。故ニ限界效用ヲ單位數ニテ乘ジタル積ハ、其時其處ニ與ヘラレタル供給ニ對シ、人ノ附スル尊重ノ總計ト爲ルモノニテ、是レ即チ其物ノ價值ニ外ナラズ。是ニ於イテカ、物ノ價值ハ其ノ限界效用ニ依リテ定マルト云フノ法則ヲ生ズ。(中略)。

以上述べタル所ヲ更ニ圖解スレバ左ノ如シ。



上圖ニ於イテハ、A Bヲ以テ貨物ノ分量ヲ表シ、A Cヲ以テ其ノ效用ヲ表ス。即チ一定ノ貨物ノ供給ヲバ十單位トスル時ハ、其ノ第十單位ノ效用ハ三十六ニシテ、以下其ノ供給ヲ増スニ從ヒ、第十五單位ノ效用ハ三十トナリ、第二十單位ノ效用ハ二十五トナリ、此ノ如クニシテ遞減スルモノトセバ、其ノ價值ノ關係ハ次表ノ如クナルベシ。

供給量	限界效用	全供給ノ價值	供給量	限界效用	全供給ノ價值
一〇	三六	三六〇	四〇	一五	六〇〇
一五	三〇	四五〇	五〇	一〇	五〇〇
二〇	二五	五〇〇	六〇	五	三〇〇
三〇	一九	五七〇			

三 所謂限界效用說ノ誤謬

一定量ノ物ノ價值ハ其ノ限界效用ニ單位數ヲ乗ジタル積ニ依リテ定マルト云フ說ノ要旨ニ以上ノ如シ。今マ吾人ハ、其ノ謂フ所ノ價值ノ何物タルヤハ姑ク之ヲ別論ニ譲リ、茲ニハ其ノ如何ナル種類ノ價值タルヤヲ問ハザラシ。然リ、其ノ謂フ所

ノ價值ハ如何ナル種類ノ價值ナリトスルモ、吾人ノ見ル所ニ依レバ、一定量ノ物ノ價值ハ決シテ此ノ如キ限界效用ニ依ツテ定マルモノニ非ザル也。請フ以下其ノ然ル所以ヲ論證セン。

蓋シ右ノ價值說ヲシテ若シ眞ナリトセバ、物ハ其ノ分量ヲ増スニ從フテ其物ノ全體ノ價值ハ、或ル程度マデハ次第ニ増加スト雖モ、或ル程度以上ハ却テ漸次減少スルコト、爲ルベキ也。例ヘバ先キニ掲ゲタル例ニ依レバ、十箇ノモノ、全體ノ價值ハ三六〇ニシテ、十五箇ノモノハ四五〇、二十箇ノモノハ五〇〇ト云フガ如クニ、或ル程度マデハ箇數ヲ増加スルニ從フテ其ノモノ、全體ノ價值ハ次第ニ増加スト雖モ、而カモ四十箇ノモノ、全體ノ價值ハ六〇〇ナレドモ、五十箇ノモノハ五〇〇、六十箇ノモノハ三〇〇ト云フガ如クニ、或ル程度以上ニ達スル時ハ、箇數ノ増加ニ伴フテ其物全體ノ價值ガ却テ減少スルコト、爲ル也。乍併、物全體ノ價值ガ其ノ分量ノ増加ニ伴フテ減少スト云フコトハ、元來不可考不可解ノコト也。例ヘバ人ガ六十箇ノ林檎全體ノ價值ヲ以テ五十箇ノ林檎ヨリモ價值少キモノト認メ、更ニ五十箇ノ林檎全體ノ價值ヲ以テ四十箇ノ林檎ヨリモ價值少キモノト爲スト云フコトハ、凡テ人ノ日常經驗ニ照ラシテ在リ得ベカラザルコト也。此事タル、曾テ經濟

學ヲ學ビタルコトナキ者ニハ殆ド勿論ノコト、聞エンモ、既ニ斯學ニ從事セル者ニ向ツテハ、因襲ノ久シキ誤解ノ容易ニ拔ケザルモノアリ、之ヲシテ納得セシメンニハ、却テ猶ホ種々ノ議論ヲ要スルコト也。仍リテ更ニ此ノ自明ノ理ヲ說カン。

今マ假リニ極端ノ場合ヲ例示シテ其ノ誤謬ヲ一見明瞭ナラシメンニ、例ヘバ茲ニ人アリ、時計ノ存在量一箇ナル時ハ之ニ對シテ十圓ノ效用ヲ認メ、二箇ナル時ハ其ノ一箇ニ對シテ九圓ノ限界效用ヲ認メ、三箇ナル時ハ其ノ一箇ニ對シテ八圓ノ限界效用ヲ認メ、此ノ如クニシテ其人ノ時計ニ對スル限界效用ハ時計ノ存在量ヲ増スニ從フテ次第ニ減少シ、遂ニ時計十箇ナル時ハ其ノ一箇ニ對シテ僅ニ壹圓ノ限界效用ヲ有スルニ止リ、更ニ進ンデ十一箇トナル時ハ之ニ對スル限界效用ハ零タルニ至ル場合アリト假定セヨ。然ル時ニ、若シ人ノ物ニ對シテ有スル價值ハ限界效用ヲ單位數ニテ乗ジタル積ニ等シキモノナリトセンカ、一箇ノ時計、二箇ノ時計、三箇ノ時計乃至十箇十一箇ノ時計ニ對シテ、其人ノ感ズル價值ハ正ニ次ノ如クナレシム。

貨物ノ存在量	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
一單位ノ限界效用	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	0
全體ノ價值	1×10	2×9	3×8	4×7	5×6	6×5	7×4	8×3	9×2	10×1	11×0
又	10	18	24	28	30	30	28	24	18	10	0

此ノ數字ハ限界效用說ノ主論者ノ一人タルギーザーガ其著『自然價值』(註一)中ニ掲ゲタル數字ナルガ、此ノ如ク限界效用ガ遂ニ零タルニ至ル極端ノ場合ヲ想像スル時ハ、物ノ價值ハ限界效用ヲ單位數ニテ乘ジタル積ニ等シト云フ說ノ、誤謬タルコト益々明白トナル。何トナレバ、時計七箇ニ對シ貳拾八圓ノ價值ヲ感ズル者ガ、八箇ニ對シテハ貳拾四圓、九箇ニ對シテハ拾八圓、拾箇ニ對シテハ拾圓ト云フガ如ク、其ノ時計ノ數量ヲ増スニ從フテ次第ニ之ニ對スル價值ヲ減ズト云フコトハ、既ニ述ベタル如ク誠ニ在リ得ベカラザルコトナレドモ、殊ニ此ノ場合ノ如ク限界效用ノ零タル場合ヲ想像スル時ハ、十箇ノ時計ニ對シテハ拾圓ノ價值ヲ感ズル者ガ、十一箇ノ時計ニ對シテハ何等ノ價值ヲ減ゼズト云フガ如キ、極メテ不合理ニシテ事實アリ得ベカラザルノ結果ヲ生ズルニ至ル也。

試ニ思ヘ、七箇ノ時計ニ對シテ貳拾八圓ヲ投ズルヲ客マザル者ガ、八箇ノ時計ニ對シテハ貳拾四圓、九箇ノ時計ニ對シテハ拾八圓以上ノ價值ヲ認メズト云フコト、事實アリ得ベキヤ否ヤ。七箇ノ時計ニ對シテ貳拾八圓ノ價值ヲ認ムル者ガ、更ニ一箇ヲ増シテ八箇トスル時、之ニ對シテ當ニ貳拾八圓以上ノ價值ヲ認メザルノミナラズ、更ニ之ヨリ四圓ヲ減ジテ貳拾四圓ノ價值ヲ認ムルニ過ギズト云フコト、果シ

テ在リ得ベキヤ否ヤ。時計ノ如キハ數箇纏メテ買フコト稀ナレバ、暫ク林檎ナリ鉛筆ナリニ就イテ考ヘンニ、七箇ナラバ之ヲ貳拾八錢ニ買フベケレドモ、八箇ナラバ貳拾四錢ナラデハ買ハズト云ヘル人ノ曾テ之レアリシヤ吾人ノ與リ聞カント欲スル所ナリ。七箇貳拾八錢ナラバ一箇四錢ノ割合ナレドモ、之ヲ増シテ八箇トスル時、其ノ新タニ加ヘタル一箇ニ對シテ依然四錢ノ價值ヲ感ズルヤト云フニ、ソハ必ズシモ然ラザルモノニテ、或ハ參錢或ハ貳錢、或ハ壹錢ノ價值ヲ感ズルニ過ギザルベク、場合ニ依リテハ之ニ對シテ、感ズルノ價值零タルコトモアラシモ、而カモ其ノ參錢ナリ貳錢ナリ乃至壹錢ナリ零錢タル價值ノモノヲバ、新タニ貳拾八錢ノ價值アル物ニ加ヘタルガ爲メニ、其ノ物全體ノ價值ガ貳拾八錢ヨリ減ジテ貳拾四錢トナルト云フコト、理ニ於イテ在リ得ベカラザル也、殊ニ十箇ノモノニ對シテ十ノ價值ヲ感ジ居タル者ガ、十箇ガ増加シテ十一箇トナル時、之ニ對シテハ何等ノ價值ヲ感ゼザルニ至ルト云フガ如キハ、誠ニ奇怪至極ノコトニテ所謂學者ナラデハ考ヘ得ザルコトナルベシ。

一定量ノ物ノ價值ハ其ノ單位數ヲ限界效用ニテ乘ジタル積ニ等シト云フ說ノ論理的必然ノ結果トシテ斯カル奇怪ノ論結ヲ見ルニ至リタルコトハ、先ヅ主論者

自身ノ少カラズ奇怪ニ感ゼン所ト見エテ現ニギーザーノ如キモ前ニ掲ゲタルガ如キ數字ニ就イテ物ノ價值ヲ説明シナガラ彼ハ次イデ左ノ如ク云ヘリ。曰ク『人若シ供給全體ノ價值ヲ觀察シ、ソガ供給量ヲ増スニ從フテ一旦十ヨリシテ三十二至ルマデ増加シ、然ル後再ビ三十ヨリ十二復歸シ而シテ零タルニ至ルヲ見ル時ハ、此事タル、吾人ノ凡テガ日常經濟生活ノ印象ヨリ得タル價值觀ト、正ニ相反セルモノ如ク考ヘラルベシ』(註二)。又タ曰ク『ソハ一ノ關係ニ於イテハ逆說ナルガ如ク見エ、又タ或ル關係ニ於イテハ全然二律背反ナルガ如ク見エ』(註三)。扱テ其ノ論結ガ此クマデ奇怪ニ感ゼラレ、斯クマデ自家撞著ト見ユルナラバ、氏タルモノ宜シク其ノ本ニ反リテ考慮ヲ重ヌベカリシニ、事茲ニ出デズシテ、先キノ矛盾ヲ辯護スルガ爲メニ、更ニ一節(第一編第一章第十節)ノ論ヲ重テ益々謬論ヲ重ヌルニ至リシハ、吾人ノ甚ダ遺憾トスル所ナリ。此ノ一節ノ論、頁ヲ費スコト六、繃縫甚ダ努ムト雖モ論旨益々支離シテ、殆ンド茲ニ舉ゲテ辯駁スルノ價值ダニ無シ。故ニ今マ略シテ述ベズ。然ルニ茲ニ面白キハ、此點限界效用說ノ最大誤謬ノ一ナレバ、之ガ主張者自身ニトリテモ何トナク氣懸リノ感ジスルト見エテ、英國ニ於ケル此ノ學說ノ普及者ノ一人タルスマートガ、其ノ著『價值序論』ニ於イテ限界效用說ノ要領ヲバギーザーノ

説クガマ、ニ之ヲ紹介シツ、猶ホ先キニ余ガ此説ノ一大誤謬トシテ指摘セシ點
 ニ對スルギーザーノ繙縫説ニ就イテハ、更ニ之ヲ詳細ニ紹介シテ、特ニ之ヲ其著ノ
 附録ト爲シ居レルコト也(註四)。夫レ溺ル、者ハ藁ヲモ擱ムト云ヘリ。支離滅裂ヲ極
 ムルギーザーノ繙縫説サヘ、左程マデ便リニナルノ心地セラレシカト、イト笑止ナ
 リ。而シテ更ニ面白シト思フハ、ギーザー自身ガ其書ノ後段ニ於イテ、思ハズ識ラバ
 事ノ真相ヲ語リ居ルコト也。其言ニ曰ク『價值ト效用ト矛盾シ、一方ガ増加ノ傾向ヲ
 有スルニ拘ラズ他方ガ減少ノ傾向ニ在ルト云フガ如キハ、經驗上稀有ノコト也』(河
 上イフ、豈ニ當ニ稀有ノミナランヤ、此ノ如キハ絶無ノコト也)。經驗上ニテハ、經濟ハ
 殆ド常ニ『向上的傾向』ニ動クモノニテ、即チ其ノ大サノ變化ノ傾向ハ價值及ビ效用
 ニ向ツテ一様ナルモノ也。供給量ノ増加スルト共ニ常ニ其ノ效用ハ増加シ、之ニ伴
 フテ價值モ亦タ増加ス。供給量ノ減少スルト共ニ常ニ其ノ效用ハ減少シ、之ニ伴フ
 テ價值モ亦タ減少ス。大ナル效用ニハ常ニ大ナル價值伴ヒ、小ナル效用ニハ又タ小
 ナル價值ヲ伴フ』(註五)言茲ニ到ツテハ、殆ド前論ノ取消ト思ハル、バカリ也。

(註一)(註二) F. von Wieser, *Der natürliche Werth*, 1889, S. 27 u. S. 28.

(註三) a. a. O., S. 26.

(註四) Smart, *An Introduction to the theory of value*, 2nd ed., 1910.

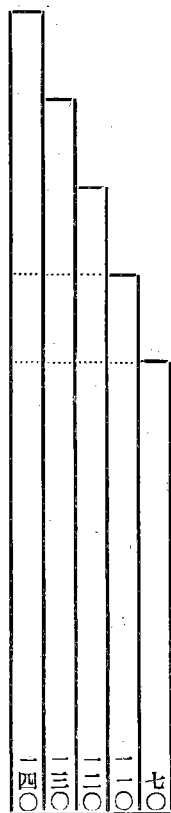
(註五) von Wieser, a. a. O., S. 33.

四 重子テ其ノ誤謬ヲ明ニス

物ノ價值ハ其物ノ供給量又ハ單位數ニ限界效用各單位ノ效用中ニテ最小ノモノヲ乘ジタル積ニ等シト云フコトノ全然誤謬ナルコト、以上吾人ノ詳論シタルガ如シ。而シテ既ニ斯クマデ論ジ來リタル上ハ最早コレ以上同ジ事ヲ論ゼンハ全ク無用ノコトナリトセラル、讀者モアラン。而シテ若シサル讀者ノ多カラバ、吾人ノ本懷既ニ遂ゲラレタルワケナレドモ、恐ラク猶ホ承服サレザル讀者ノ却テ多キコトナラン。仍ツテ吾人ハ、メンガーガアダム、スミスニ倣フトテ多クノ事例ヲ繰リ返ヘシ、舉ゲタル所ニ復タ倣フテ、甚ダ煩ハシキヤウナレドモ、更ニ例ヲ舉ゲテ物ノ價值ガ限界效用ニ單位數ヲ乘ジタル積ニ等シト云フ說ノ誤レル所以ヲ論ゼン。最早コレ以上同ジコトヲ論ゼンハ全ク無用ノコトナリト思ハル、讀者ハ、宜ク此ノ一節ヲ省略シテ直チニ次節ノ論ニ移ラルベシ。

凡ソ吾人ノ價值判斷ハ物ノ賣買ノ際ニ最モ明白ニ表ハル、モノナレバ、物ノ賣買ノ場合ニ就イテ實際ニ起リ得ベキ一二ノ場合ヲ舉ゲテ、再ビ限界效用說ノ是非ヲ吟味センニ、例ヘバ座布團一枚宛買フ時ハ一枚ニ付キ壹圓ノ市價ニテ五枚纏メテ買フ時ハ合計四圓八拾錢ノ市價ナリト云フ場合ニ、余ハ四圓八拾錢ヲ投ジテ五

枚ヲ買フ代リニ、四圓ヲ投ジテ四枚ダケ買ヒ求メタリトセヨ。然ラバ余ハ、座布團五枚ハ四圓八拾錢ニ相當スルノ價值ナケレドモ、四枚ダケノモノハ四圓以上ニ相當スルノ價值アリト爲セル也。故ニ此ノ場合ニ於イテハ、第五枚目ノ座布團ハ八拾錢以下ノ價值ノモノ、例ヘバ七拾錢ニ相當スル價值ノモノト看做セル也〔モシ然ラズシテ、八拾錢以上ノ價值アルモノト看做セルナラバ、四枚ニ向ツテ四圓ヲ投ジタル余ハ、當然五枚ニ向ツテ四圓八拾錢ヲ投ズベケレバ也〕。而シテ若シ限界效用說ヲシテ眞ナラシムレバ、四枚ノ座布團ヲ以テ四圓以上ノ價值アリトスルカラニハ、第四枚ノモノト效用〔即チ限界效用〕ヲ以テ壹圓以上、例ヘバ壹圓拾錢ニ相當スルモノト看做セル也。而シテ、既ニ第四枚目ノモノ、效用ヲ以テ壹圓拾錢ニ相當ストセンカ、第三枚目ノモノ、效用例ヘバ壹圓貳拾錢、第二枚目ノモノハ例ヘバ壹圓參拾錢、第一枚目ノモノハ例ヘバ壹圓四拾錢ニ相當シ居ルベキ也。依ツテ之ヲ圖ニ表ハセバ左ノ如クナルベシ。



即チ座布團四枚ノ全部效用ハ $140 + 130 + 120 + 110 = 500$ ニシテ、其ノ全體ノ價值ハ $110 \times 4 = 440$ ナリ。扱テ全部效用ハ 500 (五圓) ニシテ、全體ノ價值ハ 440 (四圓四拾錢) ノモノヲバ、前ノ設例ニ依レバ、 400 (四圓) ニテ購入セルコト故、コノ場合ハ別ニ不思議ノ現象ト爲ラズ、然ルニ先キニ五枚ヲバ四圓八拾錢ニテ買フコトヲ欲セザリシモノガ、若シ四圓五拾錢ナラバ之ヲ買フベシト提言シタリトセヨ。斯カル提言ハ事實人ノ爲シ得ベキコトニテ、斯カル提言ヲ爲シタリト假定スルコトハ、決シテ事實在リ得ベカラザルコトヲ假定スル次第ニ非ズト雖モ、而カモ此ノ假定ノ下ニ於イテ限界效用說ノ理論ハ果シテ如何ナル結論ヲ生ズベキヤ。此ノ場合ニ座布團五枚ノ全部效用ハ $140 + 130 + 120 + 110 + 10 = 570$ ニシテ、其ノ全體ノ價值ハ、限界效用說ノ理論ニ從ヘバ $70 \times 5 = 350$ ナリ。故ニ此ノ場合ハ 350 (參圓五拾錢) ノ價值ノモノヲバ 450 (四圓五拾錢) ナラバ買ハント提言セルコト、爲ル。是レ豈ニ不合理ノ極ニ非ズヤ。而シテ此ノ如キ不合理ノ結果ヲ生ズル所以ハ、座布團五枚ノ全體ノ價值ヲ以テ其ノ限界效用ニ單位數ヲ乗ジタル積即チ 350 (三圓五〇) ニ等シト爲ス(コレ即チ限界效用說ノ主張スル所)ニ本クニ外ナラズ。若シ此說ヲシテ眞ナラシメバ、座布團四枚ニ向ツテ四圓ヲ支拂フニ吝ナラザリシモノガ、同ジ座布團五枚ニ向ツテハ、參圓五拾錢

以上ヲ支拂フヲ拒絶スルコト、爲ラザルベカラズ。世豈ニ斯カル不可解ノ現象アラシヤ。

限界效用說ノ誤謬タルコトハ此ノ如ク明カナレドモ、此說ニ因ハレ居ル者ハ猶ホ吾人ノ所論ニ疑ヲ挾ミ、何トカシテ吾人ノ所論ノ缺點ヲ見出サントスルノ結果、或ハ論ヲ爲シテ曰ハシ、以上引ク所ノ諸例皆ナ效用ノ大小ヲ言表ハスニ貨幣ヲ以テスト雖モ貨幣ソノモノ、價值(其ノ所有者ノ主觀的價值)ハ圓又ハ錢ヲ以テ表示サレタル額ト同ジカラズ、即チ貨幣ソノモノ、價值ガ矢張り限界效用說ノ理法ニ依ツテ支配サレツ、アルモノナルガ故ニ、例ヘバ四圓ヲ支拂フ場合ノ壹圓ノ價值ト四圓五拾錢ヲ支拂フ場合ノ壹圓ノ價值トハ、必シモ同一ニアラズ、而カモ以上ノ諸例皆ナ之ヲ同一視セルガ故ニ其論非ナリト。若シ斯カル非難ヲ加フル者アラバ、余ハ答ヘテ曰ハシ、以上ノ諸例唯ダ事ノ明瞭ナランコトヲ期スルガ爲メニ、假ニ效用又ハ價值ノ大小ヲ表ハスニ貨幣ヲ以テセシト雖モ、ソハ必ズシモ貨幣ヲ以テ言表ハスノ必要アルニ非ズ。四圓ト云フ代リニ四〇〇ト云ヒ、四圓五拾錢ト云フ代リニ四五〇ト云ヒテ凡テ差支ナキコト也、加之等シク貨幣額ヲ以テ依然效用ナリ價值ナリヲ言表ハストモ、吾人ハ以上ノ非難ヲ避ケツ、而カモ等シク明白ニ限界效

用說ノ誤謬ナルコトヲ證明スベキ他ノ事例ヲ舉グルヲ得ベシ。

例ヘバ余ハメンガーノ『原論』一冊ニ對シ貳拾圓ニ相當スルノ價值ヲ感ジツ、アリトセヨ。而シテ余モシ其書百冊ヲ得ルトキハ(或ハ千冊萬冊億冊ト假定スルモ不可ナシ)之ニ對スル限界效用ハ零タルニ至ルモノト假定セヨ。然ラバ、カノ限界效用說ニ從ハンカ、此ノ零ノ百倍(又ハ千倍萬倍億倍)即チ零ガ、其ノ百冊又ハ千冊萬冊億冊ノ書ニ對スル余ノ價值タラザルベカラズ。故ニ一冊ナラバ貳拾圓近クノ貨幣ヲ之ガ爲メニ投ズルヲ吞マザルノ余ガ、百冊乃至千冊萬冊億冊ナラバ壹厘ノ金ヲモ之ニ投ズルヲ肯ゼザルコト、爲ルベキ也。乍併、カ、ル事ハ既ニ屢々云フ如ク、全ク在リ得ベカラザル事實ナリ。九十九冊分ダケ入用ニテ、百冊目ノモノガ不用ナラバソノ不用トスル百冊目ノモノ一冊ヲ棄ツレバ濟ムコト也。百冊目ノ一冊ガ不用ナル爲メニ、百冊全部ヲ不用ト看倣シ、一冊ナラバ貳拾圓ヲモ投ズルヲ客マザル者ガ、百冊ノモノニハ壹厘ヲモ投ズルヲ肯ゼズト云フコト、到底吾人ノ考フ得ベカラザルコト也。

五 斯カル謬說ヲ生ズルニ至リタル第一原因——主觀的

價值ト客觀的價額トノ混同

以上述ブル所ニ依ツテ考フレバ、限界效用說ノ誤謬ハ既ニ已ニ甚ダ明白ナラン。然ルニ其ノ誤謬ノ此ノ如ク明白ト爲ルニ付ケテハ、讀者ノ西洋人ヲ尊敬スルノ甚シキ、或ハ疑ヲ起シテ曰ハン、西洋著名ノ學者ニシテ斯カル自明ノ理ヲ誤解スルノ理ナシ其ノ誤解セリト云フハ恐ラク論者ガ却テ彼等ノ說ヲ誤解セルニ本クナラント。乍併、後ニ列舉スル所ニ依リテモ明カナルガ如ク、余ハ決シテ彼等ノ說ヲ誤解スシ居レルニ非ズ。而シテ余ヲ以テ見レバ、彼等著名ノ學者ガ此ノ自明ノ理ヲ誤解スルニ至リタルニ付イテハ、又タ多少ノ因縁アルコト也。仍ツテ余ハ、日本人タル後學ノ弱味ヲ甘受シテ、以下、彼等著名ノ西洋ノ學者ガ何故ニ斯カル誤解ヲ爲スニ至リシカノ理由ヲ推論シ、以テ讀者ノ余ニ對スル最後ノ疑惑ヲ打ち拂フノ便ト爲サン。蓋シ學者ノ從來價格論ヲ爲スヤ、多クハ自由競争ノ完全ニ行ハレツ、アル一ノ市場ヲ假定トシ、其ノ假定ヲ前提トシテ、斯カル市場ニ於イテ決定セラルベキ價格ニ就イテノミ論ヲ立テタリ。故ニ同一ノ市場ニ於イテ、一定ノ時、一定ノ貨物ニ就イテハ、二様ノ價格アリ能ハザルモノナリトノ法則ヲ生ゼリ。而シテ余ノ見ル所ニ依レバ、此ノ法則ガ先キニ述べタル限界效用說ノ誤謬ノ一原因タルモノ、如シ。煩シケレドモ、吾人ハ前ニ掲ゲタルギーザーノ立例ヲバ、再ビ左ニ掲グベシ。

(I) 貨物ノ供給量	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
(II) 限界效用	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	0
(III) 全部效用	10	10+9	10+8	27+7	34+6	40+5	45+4	49+3	52+2	54+1	55+0
(VI) 又ハ	10	19	27	34	40	45	49	52	54	55	55
(VII) 限界效用說ノ所謂全體ノ價值	1×10	2×9	3×8	4×7	5×6	6×5	7×4	8×3	9×2	10×1	11×0
(VII) 又ハ	10	18	24	28	30	30	28	24	18	10	0

扱テ右ノ場合ニ於イテ假ニ問題ト爲レル貨物ヲ林檎ナリトセンニ、若シ其ノ林檎ノ市價拾錢ナラバ、拾錢ヨリ稍々低ケレバト云フヲ精確トスレドモ、煩ケレバ、單ニ拾錢ナラバト云フニ止メ置ク、以下凡テ之ニ準ズ。其人ハ林檎一箇ヲ買フニ止ルベシ何トナレバ、其人ハ林檎一箇ニ就イテハ拾錢ノ限界效用ヲ認ムト雖モ、其ノ供給増加シテ二箇トナル時ハ、第一箇ノ林檎ニ就イテハ拾錢ノ限界效用ヲ認ムルモ、第二箇ノ林檎ニ就イテハ九錢ノ限界效用ヲ認ムルニ過ギザルガ故ニ、其ノ九錢ニ相當スト認ムルモノニ向ツテ拾錢ヲ投ズルコトヲ差控ユベケレバ也。然ルニ若シ市價下落シテ一箇九錢トナル時ハ第二箇ノ林檎ノ限界效用ト正ニ一致スルニ至ルガ故ニ、精確ニ云ハバ、市價下落シテ一箇九錢ヨリ稍々低クナル時ハ、第二箇ノ林檎ノ限界效用ニ比シ市價ノ方稍々低クナルガ故ニ、ト云フベキモノナレドモ、煩ケレバ單ニ斯ク言ヒ放チ置ク。以下凡テ之レニ準ズルコト前ニモ既ニ注意セルガ如

シ。其時ハ進ンデ二箇ヲ買フニ至ルベシ。然ルニ其ノ代價トシテ、彼ハ拾錢ト九錢ト合計シタル額即チ拾九錢ヲ支拂フベキヤト云フニ、必シモ然ラズ。何トナレバ、此ノ場合ハ、既ニ市價ガ九錢ト決定セラレ居ルニテ、而シテ其ノ市價ト云フハ、前ニ假定シタルガ如キ市場ニ於イテハ、同一ノ貨物ニ就イテ二様ナルコト在リ得ザルモノナルガ故ニ、一箇買フモ二箇買フモ乃至百箇千箇買フモ、凡テ一箇ニ就キ九錢ナリ。事實ニ於イテハ必シモ此ノ如クナルコトヲ得ズト雖モ、先キニ述べタル市場ニ關スル假定ヨリ引キ出サレタル法則、即チ同一ノ市場ニ於イテ一定ノ時一定ノ貨物ニ就イテハ二様ノ價格アリ能ハザルモノナリトノ法則ニ從ヘバ、市價ノ決定ハ此ノ如クナラザルヲ得ザル也。此ノ如ク一箇買フモ二箇買フモ凡テ一箇九錢ノ市價ナルガ故ニ、彼ハ二箇ノ代價トシテハ拾九錢 $(10+9)$ ヲ支拂フコトナク、單ニ拾八錢 (8×2) ヲ支拂フニ止ル也。次ニ第三箇ノ林檎ニ就イテ考フルニ、其ノ限界效用ハ八錢ナリ。故ニ市價モシ八錢ナラバ、其人ハ進ンデ三箇ノ林檎ヲ買フニ至ルベク、余ノ考ニ依レバ、之ヨリ以前市價九錢ノ時、既ニ三箇ヲ買フニ至ルモノト信ズレドモ、其ノ議論ハ暫ク後段ニ譲リ、茲ニハ假ニ限界效用說ヲ唱フル人々ノ思索ノ跡ニ從フテ論ヲ進ムル也。而シテ其ノ三箇ノ林檎ニ對シテハ、市價既ニ八錢ナルガ故ニ、前ニ述

ベタルト同ジ理由ニ依リテ、代價貳拾七錢 ($10+3+8$)ヲ支拂フコトナク唯ダ貳拾四錢 (3×8)ヲ支拂フニ止ルベシ。此ノ如クニシテ、市價ノ次第ニ下落スルニ伴ヒ、限界效用ノ低キ部分ニ向ツテ次第ニ其ノ購買量ヲ増加スルトセバ、購買量ノ増加、市價ノ下落、及ビ二者ノ關係ヨリ生ズル支拂金額ノ増減ハ、正ニ次表ノ如クナルベシ〔前ニ掲ゲシ表ノ(I)(II)(V)(VI)ノ四項ヲ參照セヨ。〕

(I) 購買量	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
(II) 限界及市價	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	0
(V) 支拂金額	1×10	2×9	3×8	4×7	5×6	6×5	7×4	8×3	9×2	10×1	11×0
(VI) 又ハ	10	18	24	28	30	30	28	24	18	10	0

扱テ右ノ場合ニ於イテ、限界效用說ヲ主張スル者ハ、其ノ支拂金額〔即チV及ビVIノ項下ニ示セシ數字〕ヲ以テ、各場合ニ於イテ購買者ノ感ズル價值ニ等シキモノト爲ス也。乍併、ソハ客觀的ノ交換價值ニシテ、(一單位ノ交換價值ヲ價格ト爲シ、價格ニ乗ズルニ單位數ヲ以テシタルモノヲ總體ノ交換價值ト爲シ、且ツ此ノ總體ノ交換價值ノコトヲ余ハ特ニ價額ト云フ。而シテコノ價額コソ經濟學ノ研究問題トスベキ種類ノ價值ナレドモ、其ノ性質全ク客觀的ニシテ他ノ種類ノ價值ト大ニ趣ヲ異ニスルガ故ニ、コハ價值ト云フヨリモ寧ロ價額ト云フヲ適當トス。コレ余ガ近來ノ

主張ニシテ、委細ハ猶ホ後ニ説クコトアルベシ。購買者自身ガ感ズル主觀的ノ價值ニハ非ザル也。然ルニ此ノ客觀的ノ價額ト主觀的ノ價值トヲ混同シ、否ナ此ノ如キ二様ノ概念ノ間ニ或ル區別アルコトハ一應認メナガラモ、猶ホ其ノ區別ヲ明瞭ニ看取スルニ至ラザルガ爲メニ、サテコソ物ノ價值ハ其ノ單位數ヲ限界效用ニテ乘ジタル積ニ等シト云フヤウナル説ヲ生ズルニ至リタルナレ。

而シテ彼等ガ客觀的ノ價額ト主觀的ノ價值トヲ混同シ居レルコトハ、ギーザーノ次ノ一句ヲ見テ略ボ窺ヒ知ルニ足ルベシ。勿論ギーザーハ茲ニ云フ價值ナルモノ、外ニ別ニ客觀的ノ交換價值ナルモノヲ認メ居レリ。乍併、カク二者ヲ區別シツツ其ノ傍ラヨリ之ヲ混同シツ、アル也。氏ノ言ニ曰ク『吾人ハ效用ヲ計算スルコトナクシテ、其代リニ價值ヲ計算ス。價值ハ效用ノ計算形態ナリ。而シテ此事ハ計算ヲシテ甚ク容易ナラシムルモノ也。或ル供給量ノ效用ヲ計算スルコトハ甚ダ困難ナレドモ價值ヲ計算スルハ容易ナリ。即チ或ル供給量ノ價值ハ、供給量ト限界效用トノ積ニ依リテ直チニ打算セラル、ソハ限界效用ノ或ル倍數ニ過ギザル也。……經濟上ノ計算ガ、效用計算ノ代リニ價值計算ヲ用フルコトニ依リテ簡單トナルハ、經濟ノ發展ニ伴フテ益々著シカルベキ也』(註一)。茲ニ氏ガ價值々々ト云ヘルハ皆ナ價

額〔客觀的交換價值〕ノコト也。故ニ其ノ供給量ニ價格氏ガ茲ニ限界效用ト云ヒ居レルモノハ實ハ價格タルベキ也〕ヲ乘ズレバ直チニ價值ヲ算出シ得ル也。シカルニ若シ謂フ所ノ價值ニシテ眞ニ主觀的ノ價值ナリトセンカ、既ニ主觀的ノ事柄ニ屬スルガ故ニ、其ノ秤量ハ氏ノ云フ如ク決シテ容易ニハ非ズ。若シ一箇ノ限界效用ヲ秤量スルノ可能ナラバ、其ノ前ニ位スル各單位ノ效用ヲ秤量スルモ可能ナルベク、然ラバ限界效用ニ單位數ヲ乘ジテ積ヲ得ルモ、各單位ノ效用ヲ合シテ其ノ總數ヲ取ルモ、唯ダ多少算盤ヲ入ル、上ニ面倒ノ差アリト云フノミニテ、經濟上ノ見地ヨリスレバ、二者ノ間ニ毫モ計算ノ難易テフ區別アラザル也。然ルニ氏ガ頻リニ價值ヲ以テ計算ノ容易ナルモノト爲スハ、主觀的價值ヲ論ジツ、其頭ノ中ニテハ客觀的價值ノコトヲ混同シテ考ヘ居ルガ爲メ也。然ラズンバ、何ンスレゾ價值計算ノ容易ナルコトガ、經濟ノ發展ニ伴フテ益々著シカルベキノ理アラシヤ、經濟ノ發展ニ伴フテ交換モ亦タ進歩ス。從ツテ客觀的交換價值ノ計算ハ益々容易トナル也。而シテギーザーノ指ス所ハ、即チ此ノ客觀的交換價值ニ外ナラザル也。

六 其ノ第二原因——個人ニ對スル供給量ト

天下ノ供給量トノ混同

限界效用說ナル謬說ノ出ヅルニ至リタル主タル原因ハ、此說ノ主張者ガ主觀的ノ價值ト客觀的ノ價額（一單位ノ價格ニ單位數ヲ乘ジテ得タル積）トヲ何時トハナシニ混同スルニ至リタルコト、以上述ブルガ如シ。思フニ主タル原因ハ茲ニアランガ、猶ホ其他ニモ原因アラシ。吾人ハ唯ダ其說ノ誤謬タル所以ヲ論ズレバ足ルワケニテ、一々其ノ誤謬ニ陷リシ道行ヲマデ巨細ニ列舉スルノ必要ハ必シモ是レアラズト雖モ、事ノ序ナレバ、猶ホ少シク述ベシ。

誤謬ヲ釀スニ至レル第二ノ原因ハ、或一個人ノ所有セル又ハ所有セントセル貨物ノ供給量ノ増加ト云フコトヲ、天下ノ供給量ノ増加ト云フコト、混同セルニ在ラン。元ト限界效用說ニテ供給量ノ増加ト云ヘルハ、或一個人ノ所有セル又ハ所有セントセル貨物ノ量ノ増加ト云フコトニテ、斯カル貨物ノ量ノ増加ガ、其ノ貨物ヲ所有セル又ハ所有セントセル人ノ其ノ貨物ニ對スル價值判斷ノ上ニ、如何ナル影響ヲ及ボスモノナルカラ論ゼントスルガ、其說ノ趣意ナレドモ、多クノ人ハ、何時シカ貨物ノ供給量ト云フヲ天下ノ供給量ト云フノ意ニ混同シ、少クトモ天下ノ供給

量ノ増減ニ伴フテ之ト正比例ニ個人ニ對スル供給量モ亦タ増減スルモノ、如ク考へ、而カモ其ノ供給量ノ増減ガ價值ニ影響スル作用ヲ論ズルニ當ツテハ、何時モ或ル一個人ガ其ノ所有セル又ハ所有セントセル貨物ニ對シテ感ズル價值ノコトヲ論ゼル也。乍併言フマデモナク、或ル一個人ノ所有セル又ハ所有セントセル貨物ノ量ノ増減ハ必ズシモ常ニ天下ニ於ケル其ノ貨物ノ存在量ト正比例シテ増減スルモノニ非ズ。又タ限界效用說ハ二者ノ間ニサル關係連絡アルコトヲ假定ノ前提ト爲セルニモアラズ。又タ假ニ一步ヲ讓リテ、斯カルコトヲ假定ノ前提ト爲シ居レリトスルモ、是ガ爲メニ天下ノ供給量ノ増減及ビ之ニ伴フ或ル一個人ノ貨物ノ所有量ノ増減ガ其人ノ價值判斷ニ影響シテ、少量ノ貨物全體ノ價值ヨリモ多量ノ貨物全體ノ價值ヲ小ナルモノト爲スガ如キ結果ヲ直ニ惹起スルニ至ルニハ非ズ。蓋シ天下ノ供給量ノ増減ト云フコトハ、必ズ一定ノ年月ノ經過ヲ待ツテ行ハル、コト也。而シテ其ノ年月ノ經過ノ間ニ前ノ場合ト後ノ場合トニテハ、價值判斷ノ主體タル其人ノ欲望ニ一定ノ變化起リ居ルニテ、其ノ結果トシテ、始メテ最初ハ六箇ノモノヲ三十ノ價值アリト感ジタル人ガ、後ニハ七箇ノモノヲ二十八ノ價值アルニ過ギズト爲シ、更ニ又タ時ヲ經ルニ從フテ、八箇ノ價值ヲ二十四、九箇ノ價值ヲ十八、

十箇ノ價值ヲ一〇、十一箇ノ價值ヲ零ト感ズルニ至ルノミ、即チ價值判斷ノ行ハルル時ガ前後相異リ、從テ其人ノ其物ニ對スル欲望ガ大小ノ差ヲ存スルニ至ル也。例ヘバ金剛石ノ天下ニ稀ナル時代ニハ、一粒大ノモノヲ千ノ價值アリト認メタル者ガ、其ノ生産非常ニ増加シテ今日ノ鐵ノ如クナリタル場合ニ、拳大ノモノヲ十ノ價值アリトモ認メザルニ至ルガ如シ。斯カル場合ニハ、量多キモノガ量少キモノヨリ價值小ナリトセラル、コト勿論コレアリ。乍、併、限界效用說ハ、同ジ人ガ同ジ時ニ同ジ欲望ヲ有スル場合ニ就イテ立言セルコトニテ、固ヨリ斯カル場合ノコトニ就イテ彼レ是レ云ヘルニハ非ズ。然リト雖モ、唯ダ斯カル場合ノコトガ、何時シカ論者ノ頭ニ混入シテ、量多キモノガ量少キモノヨリ價值小ナリト云フコトノ不合理ナルニ氣付カザルニ至リシナラン。

七 其ノ第三原因——效用遞減說ニ所謂消極效用

ナル觀念ノ誤謬タルコト

少量ノモノヨリモ多量ノモノ、價值却テ小ナルコトアリ得ト云フガ如キ謬說ヲ生ズルニ至リタル第三ノ原因ハ、恐ラク效用遞減ノ法則中ニ含マル、誤解ニ在ラン。

普通ニ效用遞減ノ法則トシテ説明セラル、所ニ依レバ、物ノ限界效用ハ其物ノ分量ヲ増加スルニ從ヒ次第ニ減少シテ、遂ニハ零ト爲リ、更ニ進マバ消極效用又ハ不效用 (disutility) ト爲リ、而シテ其ノ消極效用又ハ不效用ハ其物ノ量ヲ増加スルニ從フテ次第ニ増大シ、カクテ其物ノ全部效用ハ、限界效用ガ正ニ零タルニ至レル時、其ノ最大限ニ達シ、之ヨリ以上ニ其物ノ量ヲ増ス時ハ、全部效用ハ次第ニ遞減シテ、遂ニハ零トナリ、更ニ進ンデハ零以下ト爲ルト云フニ在リ。此ノ如ク效用遞減ノ法則ニ從ヘバ、物ノ效用ハ、其物ノ量ヲ或ル程度以上ニ増加スル時ハ消極效用又ハ不效用ト爲リ、カクテ其ノ全部效用ヲモ次第ニ減少スルノ結果ト爲ルガ故ニ、場合ニ依リテハ、少量ノモノヨリモ多量ノモノ、價值却テ小ナルコトアリトノ思想ヲ生ズルニ至リシカト思ハル、ガ、吾人ノ見ル所ニ依レバ、元來コノ效用遞減說ニ一大誤謬ヲ含メル也。蓋シ物ノ限界效用ハ其物ノ量ヲ増加スルニ從フテ次第ニ遞減シ遂ニ零ト爲ルト云フマデハ、決シテ誤解ニアラズ。乍併、更ニ進ンデ其物ノ量ヲ増ス時ハ之ガ限界效用ハ消極效用又ハ不效用トナルト云フニ至ツテハ則チ一大誤謬ノ見ト云ハザルベカラズ。

此事タル、等シク復々自明ノ理ニ屬スト雖モ、因襲ノ久シキ、其ノ然ル所以ヲ明カ

ニスルガ爲メニハ、又タ更ニ若干ノ議論ヲ必要トスルコトナラン。仍ツテ先ヅ例ヲ舉ゲテ論ゼンニ例ヘバ地球面上ノ空氣其ノ量若干、今マ之ヲ以テ正ニ限界效用ノ零タル點ニ到達セルモノト爲シ、且ツ效用遞減ノ法則ニ所謂消極效用又ハ不效用ノ理ヲシテ眞ナリト假定センカ。然ラバ若シ空氣ノ存在量ニシテ今日ノ二倍ト爲リ三倍ト爲ルニ至ラバ吾人ハ之ニ對シテ或ル程度ノ消極效用又ハ不效用ヲ感ズルニ至ラザルベカラザルノ道理ナリ。乍併、空氣ノ存在量ガ二倍シ三倍シ乃至千倍萬倍シテ、嘗ニ地球ノ表面ヲ包圍スルノミナラズ、廣ク全宇宙ニ瀰蔓スルニ至ルトモ、吾人ガ之ニ向ツテ消極效用又ハ不效用ヲ感ジテ、サル程度ニ空氣ハ無クモガナト考ヘ、其量ノ減少スルヲ希望スルニ至ルト云フガ如キコトハ、事實ニ於イテ到底在リ得ベカラザルコト也。而カモ此ノ事實ニ於イテ到底在リ得ベカラザルコトヲ、事實ニ於イテ在リ得ルモノト考ヘザル限り、消極效用又ハ不效用ノ說ハ成リ立タザル也。其ノ謬想タルコト、以テ徴スルニ足ル。

人或ハ洪水汎濫ノ場合ヲ指シテ、是レ水ノ分量ガ或ル程度以上ニ増加シタル爲メニ生ゼル消極效用又ハ不效用ノ實例ナリト云フモノアラン。乍併、茲ニ云フ所ノ洪水ナルモノハ、希望スベカラザル所ニ流レ出デタル特種ノ水ノコト也。而シテ斯

カル水ナラバ他ノ種類ノ水(例ヘバ井戸ノ水等)ノ一切ガ全然缺乏シ盡シタル際ニ於イテモ、常ニ消極效用又ハ不效用ヲ有スベキ也。此ノ如キハ、豈ニ雷ニ洪水ト云フガ如キ大量ノ惡水ニ限ランヤ。若シ此種ノ惡水ナラバ、僅ニ一合二合ノ水ナリトモ、其ノ希望スベカラザル時、希望スベカラザル所ニ漏出スルナラバ、常ニ一定ノ消極效用又ハ不效用ヲ有スベキ也。例ヘバ食卓ノ上ナリ椅子ノ上ナリ、肴ノ上ナリ酒ノ上ナリ、疊ノ上ナリ布團ノ上ナリニ、斯カル水ノ漏出シタリトセヨ。ソハ縦ヒ一合ニテモ二合ニテモ、乃至ハ一勾ニテモ二勾ニテモ、常ニ一定ノ消極效用又ハ不效用ヲ有スベキ也。物ノ效用ハ其物ノ量ノ増加ニ伴フテ遞減スト云フ場合ノ物ト云フハ、同一種類ノ物ニ就イテ云フコトナレバ、惡水ノ増加ヲ以テ良水ノ増加ノ結果ト看倣シ、此ノ二種ノ水ヲ連絡シテ一律ニ論ゼントスルハ、全ク事ノ真相ヲ誤解シタルモノ也。而シテ斯カル二種ノ水ヲ區別シ、良水ハ良水、惡水ハ惡水トシテ考ヘンカ、良水ハ如何ニ其量ヲ増加ストモ、決シテ消極效用又ハ不效用ヲ有スルニ至ルモノナラズ。例ヘバ余ガ井戸ノ水ノ深サガ今日ノ百倍千倍乃至萬倍億倍ト爲リタリトセヨ。是ガ爲メ余ハ之ニ對シテ消極效用又ハ不效用ヲ感ズルコト、爲リ、其水ノ量ノ減少スルヲ希望スルニ至ルカト云フニ、決シテ然ラズ。ソガ同ジ水ナル以上ハ(ソガ

同ジ條件ノ下ニ置カレタル同ジ種類ノ水ナル以上ハ、如何ニ其水ガ増加シタリトモ、吾人ノ之ニ對シテ感ズル限界效用ハ、零ニコソナレ、消極效用又ハ不效用ト爲ルト云フコトハ、決シテ在ルベカラザルコト也。

而シテ其ノ然ル所以ハ他ナシ。吾人ノ經濟慾望ナルモノハ、元來物ヲ獲得セントスルノ慾望ナルガ故ニ、其ノ慾望ハ物ヲ獲得スルニ從フテ次第ニ充足セラレ、遂ニハ充足ノ極ニ達シ、其ヨリ以上ハ、如何ニ其物ノ供給ヲ増加スルモ、更ニ慾望充足ノ度合ヲ増加セズ、其ノ部分ノ供給ノ有無増減ハ全ク痛痒相感ゼザルニ至ルト雖モ、兎モ角既ニ一定ノ經濟慾望ニシテ存在スルカラニハ、其物ノ全部效用ハ、ソノ限界效用ガ零タル點ニ至ツテ其ノ最大限ニ達シ、其レヨリ以上全部效用ハ毫モ増加スルコトコソ無ケレ、之ヲ減少スルニ至ルト云フコトハ、論理上將タ事實上、到底在リ得ベカラザルコトタル也。

之ヲ要スルニ、物ノ限界效用ハ其物ノ量ヲ増加スルニ從ツテ次第ニ減少シ、遂ニハ零タルニ至ルモノナレドモ、而カモ其レ以上其物ノ量ヲ増加シタリトテ、ソハ決シテ消極的效用又ハ不效用ト爲ルニ至ルモノニ非ズ。從ツテ又タ、物ノ全部效用ハ其物ノ量ヲ増加シ、遂ニ其ノ限界效用ガ零タル點ニ至ツテ其ノ最大限ニ達スト雖

モ、而カモ其レ以上其物ノ量ヲ増加シタリトテ、毫モ全部效用ヲ増加スルニ至ラザルマデニテ、決シテ是ガ爲メニ其ノ全部效用ヲ減少スルニ至ルモノニ非ザル也。故ニ從來ノ效用遞減說ハ此點ニ於イテ一大誤謬ヲ存ス。而シテ彼ノ限界效用說ガ、少量ノモノ、價值却テ多量ノモノ、價值ヨリ大ナル場合アリト爲セルコトガ、若シ效用遞減說ニ所謂消極效用又ハ不效用ノ說ニ本クトセバ、其ノ誤謬タルコト、此點ヨリ云フモ亦タ甚ダ明カナリト謂フベシ。

八 價值決定ノ真相——吾人ノ主張

以上吾人ハ限界效用說ノ誤謬ヲ指摘シ、且ツ斯カル誤謬ノ因ツテ生ゼシ原因ト思ハル、點ヲモ推想シテ一々之ガ批評ヲ試ミ來リシガ、顧ルニ、斯ク論ジ來ルコトニ依ツテ吾人ハ自ラ一箇ノ價值新說ヲ建立スルニ至レリ。仍ツテ以下吾人ハ、其ノ新タニ建立セシ價值說ノ要旨ヲ述ベテ、限界效用說ノ非ナル所以ヲ益々明カニセント欲ス、

先ヅ改メテ效用遞減ノ法則ヨリ述ベンニ、吾人ノ意見ニ本キ修正サレタル效用遞減ノ法則ハ、正ニ次ノ如クナルベシ曰ク、一定ノ人ガ一定ノ物ノ一單位量ニ對シテ感ズル限界效用ハ、其物ノ量ノ増加ニ伴フテ次第ニ遞減シ、遂ニ零タルニ至ル、而

シテ既ニ一旦零タルニ至ラバ其レ以上如何ニ其物ノ量ヲ増加スルモ其ノ増加シタル部分ニ對シテ感ズル效用ハ凡テ零タルモノ也故ニ物ノ量ノ増加ニ伴フ全部效用ノ増加ノ割合ハ其物ノ量ヲ増加スルニ伴フテ次第ニ遞減シ遂ニハ零ト爲リ其レ以上ハ如何ニ其物ノ量ヲ増加スルモ其物ノ全部效用ハ何等ノ増減ヲ見ザルニ至ルモノトス

然ラバ一定量ノ物ノ全體ノ價值ハ如何ニシテ定マル乎限界效用說ハ其物ノ單位數ニ限界效用ヲ乗ジタル積ニ依ツテ定マルト云フト雖モ吾人ハ其ノ各單位ノ效用ノ和即チ全部效用ニ依ツテ定マルト云フ。

試ニ先キニギーザーノ著書ヨリ轉載セシ數字ニ本キテ限界效用說ト吾人ノ新說トノ相違ヲ示サバ左ノ如シ。

貨物ノ供給量	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
限界效用	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	0
限界效用積	1×10	2×9	3×8	4×7	5×6	6×5	7×4	8×3	9×2	10×1	11×0
全體ノ供給量	10	18	24	28	30	30	28	24	18	10	0
又ノ說ニ從ハ	10	10+9	19+8	27+7	34+6	40+5	45+4	49+3	52+2	54+1	55+0
又	10	19	27	34	40	45	49	52	54	55	55

右ノ數字ニ本キ限界效用說ノ主張ニ從ヘバ林檎一箇ニ對シ一〇ノ價值ヲ感ズ

ル者ハ、二箇ニ對シ一八($2 \times 9 \parallel 18$)ノ價值ヲ感ズルニ過ギズ。從ツテ若シ假ニ貨幣ニ對スル價值ハ變化ナキモノトシ、且ツ價值ノ一單位ガ壹錢ニ相當スルモノトセバ、林檎ノ市價拾錢ヨリ幾何カ低キ時(例ヘバ九錢九厘九毛乃至九錢ナル時)ハ之ヲ購入スルコト一個ニ止ルベク、其ノ市價九錢ヨリ幾何カ低キ時(例ヘバ八錢九厘九毛ナル時)ニ至ツテ始メテ之ヲ購入スルコト二箇ナルベシト云フ也。然ルニ余ノ說ニ從ヘバ、林檎一箇ニ對シ一〇ノ價值ヲ感ズル者ハ、二箇全體ニ對シ一九($10 + 9 \parallel 19$)ノ價值ヲ感ズベキガ故ニ、一箇宛買フニ非ズシテ二箇纏メテ一時ニ買フ場合ナラバ、其ノ市價ガ九錢五厘($9.5 \parallel 9.5$)ヨリ幾何カ低キニ至ラバ、(例ヘバ九錢四厘九毛タルニ至ラバ)限界效用說ノ唱フルガ如ク、ソガ八錢九厘九毛タルニ至ルヲ待タズシテ、早ク既ニ二箇ヲ購入スルノ決意ヲ爲スベシト云フ也。即チ限界效用說ニ從ヘバ、二箇纏メテ一時買フ場合ニテモ、之ニ向ツテ支拂ヒ得ル最大ノ犧牲ハ必ズ拾八錢(2×8)以下、(例ヘバ拾七錢九厘九毛(2×8.99)以下ナレドモ、余ノ說ニ從ヘバ拾九錢($10 + 9$)以下、(例ヘバ拾八錢九厘九毛(2×8.99)以下タリト云フ也。二者ノ是非ハ姑ク舍ク、唯ダ其ノ相違ハ茲ニ至ツテ一見明白ナリト謂フベキ也。

余ノ主張スル所ハ此ノ如シ。乍併、此點ニ就キ充分ニ讀者ノ留意ヲ請ヒタキハ、余

ハ、一定量ノ物ヲ一全(a whole)トシテ考フル時、其物ノ價值ガ其ノ全部效用ニ依ツテ定マルト云フニテ、其ノ一定量ノ物ノ各單位ノ價值ガ全部效用ノ平均全部效用ヲ單位數ニテ割リタルモノニ依リテ定マルト云フニ非ズ。一定量ノ物ヲ一全トシテ考フル時、其物ノ價值ガ其ノ全部效用ニ依ツテ定マルト云フ故、其ノ一定量ノ物ノ各單位ノ價值ヲ打算スル爲メニハ、勿論全部效用ノ平均ヲ採ルノ外ナケレドモ、ソハ唯ダ計算上ノ手續ノコトニテ、吾人ノ價值判斷ソノモノ、順序ハ、各單位ノ價值ヲ平均效用ニ相當スルモノト認メ、之ニ單位數ヲ乘ジテ其積ヲ得、然ル後之ヲ以テ其ノ一定量ノ物全體ノ價值ナリト爲スニ非ズ。一定量ノモノヲ一全トシテ考フル場合ノコト故、其物全體ノ價值ガ其ノ全部效用ニ依ツテ定マルト主張スルモノニテ、若シ何レカノ一單位ヲ他ノモノヨリ離シテ唯ダ其ノ一單位ノミノ價值ヲ秤量スル場合ナラバ、其ノ謂フ所ノ何レカ一單位ノ價值ハ、固ヨリ限界效用(最小效用)ニテ定マルニテ、決シテ平均效用ニ相當スト見ルベキニ非ズ。

煩シケレドモ再ビ前ノ例ニ就イテ述ベンニ、物ヲ一箇宛買フニ非ズシテ纏メテ一時買フ場合ニテモ、限界效用說ニ從ヘバ、林檎ノ市價九錢ヨリ幾何カ低キニ至ツテ、人ハ始メテ二箇ヲ購入スルノ決意ヲ爲スベシト云フナレドモ、余ノ說ニ從ヘバ、

其ノ市價九錢五厘ヨリ幾何カ低キニ至ラバ、人ハ早ク既ニ二箇ヲ購入スルノ決意ヲ爲スベシト云フ也。乍併、一箇宛買フ場合ニ於イテハ、余ノ說ニトツテハ事情大ニ異ルコト、爲ル。即チ市價九錢五厘ヨリ幾何カ低キ時ナリトモ、既ニ一箇ヲ買ヒ求メタル後ハ、之ニ依リテ最早ヤ十ノ慾望ヲ充シ居ルコト故第二箇目ノ林檎ニ對シテハ九ノ效用ヲ感ズルニ過ギズ。故ニ之ニ向ツテハ最早ヤ九錢以上ヲ投ズルコトアラザル也。猶ホ充分ニ此處ノ關係ヲ明カニセンガ爲メニ、再ビ前ノ數字ニ本キ左ニ一表ヲ掲ゲテ説明センニ、假ニ平均效用ノ文字ヲ用フレバ其ノ限界效用ニ對スル關係左ノ如シ。

貨物ノ供給量	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	
限界效用	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	0(II)
全部效用即ち全 所謂全體ノ價值	10	10+9	19+8	17+7	34+6	40+5	45+4	49+3	52+2	54+1	55+0(III)
	10	19	27	34	40	45	49	52	54	55	55(IV)
限界效用說ノ所 謂全體ノ價值	1×10	2×9	3×8	4×7	5×6	6×5	7×4	8×3	9×2	10×1	11×0(V)
	10	18	24	28	30	30	28	24	18	10	0(VI)
平均效用	10	$\frac{19}{2}$	$\frac{27}{3}$	$\frac{34}{4}$	$\frac{40}{5}$	$\frac{45}{6}$	$\frac{49}{7}$	$\frac{52}{8}$	$\frac{54}{9}$	$\frac{55}{10}$	$\frac{55}{11}$ (VII)
	10	9.5	9	8.5	8	7.5	7	6.5	6	5.5	5(VIII)

今マ限界效用說ハ、以上ノ如キ場合ニ於イテ、吾人ノ支拂ヒ得ル犠牲ハ一箇ナラバ拾錢以下、二箇ナラバ一箇ニ付キ九錢以下、乃至、九箇ナラバ一箇ニ付キ貳錢以下、

十箇ナラバ一箇ニ付キ壹錢以下ニシテ、十一箇トナラバ無代價ナラザレバ之ヲ入
 手セズト爲セルニ反シ、〔上表ノ(II)項ヲ見ヨ〕余ハ、一箇ナラバ同ジク拾錢以下ナレド
 モ、其ヨリ以上一時ニ纏メテ買フ場合ナラバ、二箇ノ時ハ一箇ニ付キ九錢五厘以下、
 三箇ノ時ハ一箇ニ付キ九錢以下、〔限界效用說ニ從ヘバ之ガ恰モ二箇ノ時ニ等シ〕乃
 至、九箇ナラバ一箇ニ付キ六錢以下、十箇ナラバ一箇ニ付キ五錢五厘以下ニシテ、十
 一箇ノ場合ト雖モ一箇ニ付キ略ボ五錢〔限界效用說ニ從ヘバ之ガ恰モ六箇ノ時ニ
 等シ〕ニ近キ犧牲ヲ供シ得ベシト云フ也〔上表ノ(VIII)ヲ見ヨ〕乍併、モシ一箇宛買フ場合
 ナラバ、吾人ト雖モ、第二番目ノ林檎ニ向ツテ提供シ得ル犧牲ハ九錢以下、第三番目
 ノモノニ向ツテハ八錢以下、乃至、第十番目ノモノニ向ツテハ壹錢以下ニシテ、第十
 一番目以下ノモノニ向ツテハ遂ニ何等ノ犧牲ヲモ支拂フヲ肯ゼザルベシト云フ
 也。故ニ余ノ說ニ從ヘバ、例ヘバ市價五錢五厘ヨリ稍々低キ時例ヘバ五錢參厘ト云
 フ時、若シ一時ニ纏メテ買フ場合ナラバ、十箇購入スベク、從ツテ之ガ代價トシテ五
 拾參錢(10×5.3)ヲ支拂フニ至ルベシト雖モ、一箇宛購入スル場合ナラバ、五箇ヲ購入
 スルニ止ルベク、從ツテ其ノ代價トシテ貳拾六錢五厘(5×5.3)ヲ支拂フニ止ルベシ
 ト云フ也。

以上吾人ハ事ヲ分リ易クスルガ爲メニ、一時ニ多數纏メテ買フ場合ト度々ニ一箇宛買フ場合トニ分チテ説明シタレドモ、吾人ノ價值判斷ヲ考究スルニ就イテ關係アルコトハ、實ハ斯カル購入手續ノ差異ニ在ルニ非ズシテ、唯ダ吾人ガ物ノ價值ヲ秤量スル場合ニ於ケル判斷力ノ働キ具合ノ差異ニ在ルニテ、詳ク言ハバ、一定量ノ物ヲ全一ノモノト考ヘテ評價スル場合ナルカ、之ハ各單位ヲ分離シテ考ヘ之ガ價值ヲ一ツ宛秤量シテ然ル後之ヲ合計シテ全體ノ價值ヲ判斷スル場合ナルカ、ト云フコトノ區別ガ眼目タル也。故ニ縱ヒ一時ニ多數纏メテ買フ場合ニテモ、之ヲ以テ價值ノ衆多ナル單位ノ集合ト考ヘテ評價スル場合ト、之ヲ以テ價值ノ一單位ト考ヘテ評價スル場合トニテハ、價值判斷ノ作用ヲ異ニスルニ至ルモノニテ、例ヘバ、前ノ場合ニハ一時ニ五箇ヲ購入スルノ決意ニ出デ、之ガ代價貳拾六錢五厘ヲ支拂フニ止ルベシト雖モ、後ノ場合ニハ十箇ヲ購入スルノ決意ヲ爲シテ、之ガ代價五拾參錢ヲ支拂フニ至ルベシト云フ也。

抑テ論ヲ進メテ此邊ニ來ル時ハ、最初ノ中ハ全然余ノ說ニ賛同サレタル讀者ノ中ニモ漸ク余ノ說ヲ怪シトスルノ感ヲ抱カル、ニ至リタルナラン。乍併、吾人ハ、一定量ノモノ、價值ヲ判斷スル時之ヲ箇々ノ單位ニ分チテ考フル場合ニハ其ノ限

界效用ヲ識別スルコトヲ得、之ニ反シ、之ヲ全一ノモノトシテ考フル場合ニハ其ノ全部效用ヲ意識スルニ止ルモノナルガ故ニ、此ノ場合ニ一定ノ差異ヲ生ズルコトハ、必然ノ結果ニシテ毫モ怪ムニ足ラザルコト、信ズ。猶ホ吾人ノ日常經驗ニ徴シ、例ヲ舉ゲテ説明スレバ、此理益々明瞭ト爲ルベシ。

例ヘバ一本五厘宛ノ「ペン」アリト假定センニ、一本宛數ヘテ買フ時、即チ一本ヲ價值ノ一單位ト考ヘテ買フ時ハ、吾人ハ、五錢ヲ投ジテ十本ヲ買ヒ、或ハ拾錢ヲ投ジテ二十本ヲ買フニ止ルト云フガ常ナリ。而シテ其ノ購買量ヲ十本又ハ二十本ニ止メテ其レ以上ヲ買フニ至ラザルヨリシテ見レバ、其時ノ慾望トノ關係上、十本以上ノ部分又ハ二十本以上ノ部分ハ、一本ニ付キ五厘宛ニ値セザルモノト爲スコト明カ也。然ルニ若シ「ペン」ニシテ一本宛賣買セラレズ、百四十四本入りノ一箱ガ一單位トシテ賣買サレレツ、アルニ止ルトセヨ。此ノ場合ニ於イテ、先キニ十本又ハ二十本ヲ買フニ止メシ人々ハ、凡テ皆ナ「ペン」ヲ購買ヲ思ヒ止ルニ至ルカト云フニ、サニアラズシテ、殆ド凡テノ人が盡ク百四十四本入りノ一箱ヲ買フニ至ルベシ。「ペン」ヲ使用シツ、讀者諸君ノ凡テガ斯カル場合ニ如何ニ決意セラル、カヲ内省シ見ラレヨ」普通百四十四本入りノ一箱ハ賣價五十錢位ナレドモ、假リニ一本五厘宛ト計算

スレバ、其價七拾貳錢ナリ故ニ此ノ場合ノ結果ヲ改メテ明記スレバ、一定量ノ「ペン」ヲ一本宛ノ單位ニ分チテ考フル場合ニハ、十本又ハ二十本ヲ購買スルニ止メ、從テ五錢又ハ拾錢ヲ投ズルニ過ギズト雖モ、若シ一定量ノ「ペン」ヲバ全一ノモノトシテ評價スルノ必要ニ迫マラレタル場合ニハ、同ジ時ニ同ジ人ガ、百四十四本ヲ購買シ、之ニ向ツテ七拾貳錢ヲ投ズルコトモ有リ得ルモノタル也。唯ダ「ペン」ノ場合ハ、今日事實上一本宛賣買サレアルガ故ニ、多クノ場合ニ於イテ吾人ハ之ヲ一本宛ノ單位ニ分チテ考フルノミナラズ、之ヲ全一トシテ考フル場合ハ必ズ百四十四本ト限ラル、故引例トシテ聊カ適切ナラザレドモ、之ヲ逆ニ考フル時ハ、事情更ニ明瞭ト爲ルベシ。例ヘバ比較的所得ノ多キ人ニテ、普通ニハ「ペン」一箱宛ヲ購入セル者ガ、偶々一本宛商フ店ニ入りタリトセンニ、其ノ時モ矢張り百何十本ト云フ程買ヒ求ムベキカト云フニ、多クハ然ラズシテ、矢張り十本二十本ト云フ數ニ止ルベシ。此ノ如ク吾人ノ價值判斷ハ、一定量ノ物ヲ單位ニ分チテ考フル時ト、之ヲ全一ノモノトシテ考フル時トニテハ、大ニ其趣ヲ異ニスルモノニテ、即チ先キニ林檎ニ就イテ述べタル場合ノ如ク、一箇宛別々ニ考ヘテ買フ時ハ、五箇ヲ購入スルニ止メテ貳拾六錢五厘ヲ拂ヒ、一定量ノモノヲ全一ノモノト考ヘテ買フ時ハ、十箇ヲ購入シテ五拾參錢

ヲ拂フニ至ルベシト云フコトハ、少ク吾人ノ日常經驗ニ就イテ内省センカ、毫モ怪シトスルニ足ラザルコト也。猶ホ甚ダ粗雜ナル例ナレドモ、了解シ易カルベケレバ、更ニ一例ヲ附加シ置カンニ、カノ富山房ヨリ發賣セシ『漢文大系』ト云フ叢書ハ、各卷其ノ内容ヲ異ニスルコト故之ヲ以テ同一物ト看做スコト能ハザレドモ、假ニ各卷同一物ト看做シ、而シテ之ニ對シ余ノ感ズル效用ハ先キニ掲ゲタル表約六頁前ヲ見ヨノ如クナリトセンカ、若シ此ノ場合ニ、一卷ノ定價五圓ヨリ僅カニ安シト云フ程度ナラバ、一卷宛ニ分チ考ヘテ買フ時ハ六卷ダケ買フベク、幾卷カヲ纏メテ之ヲ全一ノモノト考ヘテ買フ時ハ十一卷ダケ買フベシ〔前ノ場合ニハ六卷目ノ限界效用ガ五ニシテ、後ノ場合ハ十一卷ノ全部效用ヲ平均シタルモノガ五ナリ〕故ニ若シ叢書全部ガ十一卷ヨリ成リ、且ツ分冊シテ販賣セザル場合ニ於イテハ、余ハ其ノ叢書全部ヲ買フノ決意ヲ爲スベク、若シ又タ其ノ叢書ガ十一卷以上ヨリ成リ、且ツ等シク分冊シテ販賣セザルニ於イテハ、此ノ場合ハ其ノ叢書ヲ買フノ決意ヲ爲スニ至ラザルベシ、乍併、同ジ場合ニ若シ分冊シテ販賣スルナラバ、十一卷以上ノ叢書全體ニ對シテハ購買者タラザルベキ余モ、五卷ダケハ購入スルコト、爲ルベシ。即チ斯カル叢書ハ之ヲ分冊シテ販賣セザルニ於イテハ、購買者ヲシテ之ヲ一體トシテ

評價セシメ、從ツテ一卷ノ價值ヲ全部效用ノ平均ニ相當セシムルノ利益アリト雖モ、分冊シテ販賣セシ場合ノ數卷宛ノ購買者ヲ失フノ不利アルモノトス。余ノ說ニ從ヘバ此ノ如シ。然ルニ限界效用說ニ從ヘバ、何レノ場合モ其物ノ價值ハ限界效用ニ依ツテ決定セラル、ガ故ニ、分冊シテ販賣セザルガ爲メノ利益ハ全ク是レナシト云フノ結果ト爲ル。而シテ此ノ如キ結論コソ、却テ吾人ノ日常經驗ノ事業ニ背反スルモノ也。

九 吾人ノ主張ノ要領

吾人ハ以上限界效用說ヲ批評スルニ付ケテ、吾人自ラノ價值說ノ大體ヲ述べ試ムルニ至リタリ、今マ重テ之ヲ要約スレバ左ノ如シ。

物ノ限界效用ハ其物ノ量ヲ増加スルニ從フテ遞減シ、遂ニ零タルニ至ルモノナレドモ、其ヨリ以上ハ如何ニ其量ヲ増加ストモ、限界效用ハ依然零タルノミニテ、消極效用又ハ不效用ト爲ルモノニアラズ。

故ニ、物ノ全部效用ノ増加スル割合ハ、其物ノ量ヲ増加スルニ從フテ次第ニ遞減シ、遂ニハ新タニ其量ヲ増加スルモ毫モ全部效用ヲ増加セザル程度ニ達スルモノナルガ、其ヨリ以上ハ、如何ニ其量ヲ増加ストモ、全部效用ハ依然トシテ何等ノ増減

ヲ見ザルノミニテ、畢竟スルニ、或ル一單位ノ限界効用ガ零タル限リハ、其物ノ量ノ大小ニ拘ラズ、之ガ全部効用ハ常ニ最大限ヲ保チ居ルモノトス。

一定量ノモノ、全體ノ價值ハ其ノ全部効用ニ依ツテ定マル。故ニ物ハ其量ヲ増加スルニ從フテ其ノ價值ヲ増加スルモノナレドモ、其ノ一單位ノ限界効用ガ零タルニ至ラバ、其ヨリ以上ハ、如何ニ其量ヲ増加ストモ、其物ノ全體ノ價值ハ依然トシテ何等ノ増減ヲ見ザルモノトス。

一定量ノ物ノ全體ノ價值ハ其ノ全部効用ニ依ツテ定マルガ故ニ、其ノ全體ノ價值ヨリ之ガ一單位ノ價值ヲ計算スル時ハ、恰モ平均効用ニ相當スルモノトス。サレバ凡テノ單位ノ價值ガ、限界効用ニ依ツテ定マルト爲スハ、全然誤謬ナリ。

一定量ノ物ノ全體ノ價值ヨリ之ガ一單位ノ價值ヲ計算スル時ハ、其ノ一單位ノ平均價值ハ物ノ量ノ増加ニ伴フテ遞減スルモノトス。乍併、ソハ限界効用ノ遞減スル程度ニ比例シテ遞減スルモノニ非ズ。

一定量ノ物ノ何レカ一單位ヲ他ノ單位ヨリ分離シテ其物ダケノ價值ヲ獨立シテ秤量スル時ハ、其ノ單位ノ價值ハ限界効用ニ依ツテ定マルモノトス。故ニ限界効用零タル場合ニハ、何レカ一單位ノ價值ハ零タルノミナラズ、若シ大部分ノ單位ノ

限界效用ガ凡テ零タル場合ノ如キハ、其ノ大部分ノ單位ノ全體ノ價值モ亦タ零タルモノトス。

一〇 所謂限界效用說ノ廣ク行ハレツ、アル二三ノ實例

限界效用說ガ學者ノ思想ヲ支配セシコト久シカズトセズ。然レドモ、其ノ全然誤謬タルコトハ、實ニ上論ノ如シ。

要スルニ、一定量ノ物ノ何レカ一單位ヲ他ノ單位ヨリ分離シテ、其物ダケノ價值ヲ獨立シテ秤量スル時、其ノ單位ダケノ價值ガ限界效用ニ依ツテ定マルノミニテ、其ノ一單位ノ價值ガ、引イテ一定量ノ物ノ全體ノ價值ヲ決定スルニ非ザル也。サレバ若シ限界效用說ニシテ、一定量ノ物ノ何レカ一單位ノ價值ヲ獨立シテ秤量スル時、ツノ單位ダケノ價值ガ限界效用ニ依ツテ決定セラルト云フニ止ルモノナラバ敢テ非難スベキヤウナシト雖モ、ソガ進ンデ、何レカ一單位ノ價值ヲ以テ他ノ凡テノ單位ノ價值ヲ決定スルモノト爲スニ至ツテ、則チ一大誤謬ニ陷レリト爲サザルヲ得ザル也。

斯ク云ハ、讀者或ハ吾人ヲ疑フテ、限界效用說トハ果シテ余ガ說クガ如キモノナルヤ否ヤヲ危ムニ至ラン。仍ツテ吾人ハ、無數ノ著書ノ中ニ就キ一二ノ實例ヲ舉

ゲテ、吾人が敢て、此説ヲ誤解シテ攻撃シツ、アルニ非ザルノ證據ト爲サン。

フエターノ所論ハ既ニ本論ノ冒頭ニ掲ゲタレド、猶ホ原文ノ一節ヲ左ニ轉載シ置カン。

The marginal unit of a homogeneous supply cannot be considered to have a greater utility than any other unit at the moment, and therefore the product of the marginal utility by the number of unity, gives the total measure of importance of the supply then and there, and this is the value. (Fetter, The principles of economics, 1904, p. 23.)

『限界效用ヲ單位數ニテ乘ジタル積ハ、其時其處ニ於ケル全供給ノ重要ノ度合ヲ示スモノニテ、コレ即チ其ノ價值ナリ』ト云フ意ナリ。

ギーザーノコトモ屢々前ニ引キタレバ、一應氏ノ言葉ヲ轉載シ置カンニ、氏ハ明白ニ次ノ如ク云ヘリ。

Ein Vorrath überhaupt hat einen Werth, der gleichkommt dem Producte der Stückanzahl (oder der Anzahl von Theilmengen) mit dem jeweiligen Grenznutzen. (Der natürliche Werth, S. 24.)

『一定量ノ物ノ價值ハ其ノ單位數ニ限界效用ヲ乘ジテ得タル積ニ等シ』ト云フノ意ナリ。

スマートモ亦タ次ノ如ク明言セリ。

If the marginal utility determines the value of one, it must determine the value of all..... Thus we obtain the universal formula for the valuation of goods in quantity. The value of a quantity of similar goods is the value of the marginal good

multiplied by the number of the goods. (The theory of value, p. 33.)

右ノ一文ノ大意ハ『若シ或ル一ノモノ、價值ガ限界效用ニ依ツテ定マルナラバ凡テノモノ、價值モ亦タコレニ依ツテ定マラザルベカラズ。……………カクテ吾人ハ一定量ノ財ノ評價ニ就キ一般的ノ法則ヲ得。曰ク、同一ノ財ノ一定量ノ價值ハ、限界財ノ價值ニ財ノ單位數ヲ乗シタルモノ也。』ト云フコト也。

猶ホ此類ノ說舉ゲ來ラバ限ナケレドモ、煩シケレバ、吾人ハ以下唯ダ我國ニ於イテ最近ニ發行サレシ著書二三ニ就イテ之ガ實例ヲ掲グルニ止メ置カンニ、近頃河田學士及ビ余トノ解説ニ成レルピールソン經濟原論ノ原文(英譯文)ニハ、左ノ如キ説明アリ。

The value of a definite quantity of a commodity depends upon the least of the advantages resulting from the possession of that quantity.……………The value of things is determined by the utility of their last increment. (Pierson, Principles of Economics, p. 52, 1899.)

コレ亦タ前ニ掲ゲタルフエター、ギーザー、スマート等ト全ク同様ナリ。

又タ昨年公ニサレタル『經濟全書』中、氣賀氏ノ交易論ニハ左ノ如ク説明シアリ。

然レバ吾人ハ一般的ニ論斷シテ、數箇ノ單位量ヨリ成レル貨物ノ一箇又ハ一定單位ニ對スル主觀的價值ハ、其全量中ノ最後ノ一單位量ガ吾人ニ與フル效用ノ大小ニ準ジテ決定セラルト云フヲ得可シ。而シテ吾人ハ此最後ノ一單位ノ效用ヲ通例稱シテ限界の效用ト名ケ……………一般ニ貨物ノ主觀的價值ハ其限界の效用ニ依リテ定マルト云フヲ常トス。(經濟全書第一卷經濟原論七)

又々本年公ニサレタル戸田博士ノ『日本ノ經濟』中、『價格ヲ論ズ』ト云ヘル章下ニモ同ジ事ヲ論ジテ左ノ如ク記載シアリ。

斯ノ如ク價值ハ限界效用ニ依リテ定ルガ故ニ、例ヘバ茲ニ十箇ノ貨物アリテ其最初ニ使用セラル、一箇ノ效用ヲ十トシ、漸次ニ一ゾ、效用ヲ減ジテ限界效用ハ一トナル場合ニハ、其貨物全體ノ價值ハ十二過ギザルガ如シ。(前掲、六四五頁)

吾人ハ凡テノ學者ガ皆ナ一樣ニ此ノ如キ說ヲ唱ヘツ、アリト云フニハ非ザレドモ、而カモ是等ノ例ニ依ツテ考フレバ、吾人ノ見テ以テ謬說ト爲ス思想ノ猶ホ廣ク學界ニ行ハレツ、アルヲ知ルニ足ルベシ。

一 メンガー及ゼボンスノ說ハ如何

斯ク論ジ來ラバ、更ニ或ル部分ノ讀者ハ、言ヲ構ヘテ云フナラン。以上列記スル所ノモノハ、皆ナ限界效用說ヲ誤解セルニテ、元ト限界效用說ト云フハ、唯ダ一定量ノ物ノレカ一單位ノ價值ガ限界效用ニ依ツテ定マルト主張スルモノタルニ過ギズト。

思フニ若シ限界效用說ニシテ此ノ如キモノト爲サバ、以上列記セシ諸說ガ誤謬タルノミニテ、限界效用說ハ何等非難スベキ點ナキコト、爲ル。而シテ現ニ限界効

用説ノ創説者ノ一人ト目セラル、メンガーノ説ノ如キハ、一定量ノ物ノ何レカ一單位ノ價值ガ限界效用ニ依ツテ定マルト主張スルニ過ギザル也。今マ其證トシテ氏ノ説ノ一句ヲ引カンニ、曰ク

Der Werth einer *Theilquantität* der verfügbaren Gütermenge ist für jene Person demnach gleich der Bedeutung, welche die am wenigsten wichtige der durch die Gesamtquantität noch gesicherten und mit einer gleichen *Theilquantität* herbeizuführenden Bedürfnisbefriedigung für sie haben. (Carl Menger, Grundsätze der Volkswirtschaftslehre, 1871, S. 99.)

猶ホ其ノ處ノ註ニ論セル所ヲ見レバ、氏ノ言ハントスル所ハ誠ニ明白ナリ。氏ハ、一定ノ人ガ一定ノ財ニ依ツテ受クベキ慾望充足ノ度合ガ、最初十ニシテ、其ヨリ財ノ量ヲ増スニ從ツテ效用一宛ヲ減ジ、其財ノ分量十ト爲ル時ハ限界效用ハ減ジテ一ト爲ル場合ヲ假定シ、扱テ此ノ場合ニ於イテ、若シ其人ガ七ノ財ヲ所有シ居ルナラバ、其ノ七箇ノ財ノ何レカ一ニ付キ彼ハ果シテ如何程ノ價值ヲ附スベキカト云フ問題ヲ説明セルニテ、現ニ彼ハ明白ニ問題ヲ掲ゲテ

Welchen Werth würde nun in diesem Falle ein concretes Gut, beziehungsweise eine der obigen Quantitäten, für das in Rede stehende wirtschaftende Individuum haben?

ト云ヒ居ルニテ、其ノ他ノ問題ノコトハ曾テ論ジ居レルニ非ズ。而シテ此ノ問題ニ

對スル彼ノ解答ハ、前ニモ既ニ揭ゲタレド、重テ此ノ假定ノ場合ニ對スル彼ノ説明ヲ原文ノマ、茲ニ引用センニ、實ニ左ノ如シ。

Vor der Verfügung über ein concrete Gut oder eine solche Theilquantität wäre demnach in dem obigen Falle nur eine Bedürfnisbefriedigung abhängig, deren Bedeutung wir mit 4 bezeichneten und diese Bedeutung wäre, ins solange die hier in Rede stehende Person über 7 concrete Güter, beziehungsweise über die sieben oben erwähnten Theilquantitäten verfügte, der Werth jedes einzelnen Gutes, beziehungsweise jeder einzelnen Theilquantität. (a. a. O., S. 100.)

即チ氏ハ、一定量ノ物ノ何レカ一單位ノ價值ガ限界效用ニ依ツテ定マルト云ヘルノミニテ、而シテ唯ダ此ク論ゼシニ止ル範圍ニ於イテハ、彼ニ指摘スベキ何等ノ謬想ナシ。乍併、一步ヲ進メテ價格論ニ入ルヤ、彼ハ暗々裡ニ、一定量ノ物ノ全體ノ價值ガ其ノ限界效用ニ單位數ヲ乘ジタル積ニ等シト云フコトヲ、何等ノ説明ナシニ前定シ居レルニテ、此ノ點ニ至ツテハ余ガ本論ニ述ベタル一切ノ非難ハ、復タ彼ノ說ノ上ニ加フコトヲ得ベシ。

吾人ハ、今マ其事ヲ明カニセンガ爲メニ、氏ガ一方的獨占ノ場合ニ於ケル物ノ價格ノ決定ノ理法ヲ說ケル條ヲ左ニ引用スベシ。氏ハ一定ノ貨物ニ對スル^{B¹} ^{B²}以下^{B⁷} ^{B⁸}ニ至ル八箇ノ買手ノ效用ノ大小及ビ其ノ遞減ノ度合ヲ左表ノ如ク假定シタ

リ(前掲書一八七頁ヲ參照セヨ)。

貨物ノ供給量	1	2	3	4	5	6	7	8
B^1	80	70	60	50	40	30	20	10
B^2	70	60	50	40	30	20	10	
B^3	60	50	40	30	20	10		
B^4	50	40	30	20	10			
B^5	40	30	20	10				
B^6	30	20	10					
B^7	20	10						
B^8	10							

各人ノ限界效用

而シテ氏ノ所說ニ從ヘバ、此ノ場合ニ於イテ、若シ三箇ノ貨物ガ市場ニ提供セラルルナラバ、其ノ價格ハ七〇以下六〇以上ノ間ニ定リ、 B^1 ハ二箇、 B^2 ハ一箇ヲ買フベク、若シ又タ十箇ノ貨物ガ市場ニ提供セラル、ナラバ、其ノ價格ハ五〇以下四〇以上ノ間ニ定リ、 B^1 ハ四箇、 B^2 ハ三箇、 B^3 ハ二箇、 B^4 ハ一箇ヲ買フニ至ルベシト云フ也。

乍併、斯カル結論ヲ生ズル爲メニハ、二箇、三箇、四箇ノ貨物ニ對スル人々ノ價值ハ、第二箇、第三箇、第四箇等ノ限界效用ニ箇數ヲ乘ジタル積ニ依リテ定ルモノト前提スルコトヲ要ス。何トナレバ、若シ數箇ノ全體ノ價值ガ限界效用ニ箇數ヲ乘ジタル積ニ依リテ定ルニ非ズシテ、君人ノ主張スルガ如ク、其ノ全部效用ノ和ニ依リテ定

ルモノトセンカ例へバ B^1 ニ就イテ云へバ其ノ價值判斷ハ次ノ如クナルベシ。

全體ノ價值

假ニ一箇平均價值ヲ算出ス

三 箇	$80+70+60=210$	$210:3=70$
四 箇	$210+50=260$	$260:4=65$
五 箇	$260+40=300$	$300:5=60$
六 箇	$300+30=330$	$330:6=55$
七 箇	$330+20=350$	$350:7=50$
八 箇	$350+10=360$	$360:8=45$

故ニ若シモ貨物ノ價格ガ七〇以下六〇以上ノ間ニ定ラバ、彼ハ四箇又ハ少クトモ三箇ヲ買フベク、從ツテメンガーノ云フガ如ク其ノ購買量二箇ニ止ルベシト爲スガ爲メニハ、二箇三箇乃至四箇ニ對スル彼ノ價值ハ、各場合ニ於ケル限界效用ニ購買セントスル貨物ノ箇數ヲ乗ジタル積ニ等シキモノト爲サルベカラズ。又タ價格五〇以下四〇以上ノ間ニ定ラバ、メンガーノ說ニ從へバ、 B^1 ハ四箇ヲ買フニ止ルト云フニ在レド、實ハ八箇又ハ少クトモ七箇ヲ買フニ至ルベシ。何トナレバ、何レカ一單位ノ限界效用ハ四箇ノ時既ニ五〇トナレドモ、物全體ノ價值ヲ平均スル時ハ、七箇ニ至ツテ始メテ一箇ノ平均價值五〇タルニ至ルベケレバ也。

之ニ依ツテ考フレバ、メンガーハ、最初價值論ノ條下ニ於テハ、一定量ノ物ノ何レ

カ一單位ノ價值ハ限界效用ニ依ツテ定マルト爲セルニ止ルト雖モ、後ニ價格論ノ條下ニ於テハ、一定量ノ物ノ各單位ノ價值ガ一樣ニ最終ノ單位ノ效用ニ依リテ定ルト爲スモノニテ、縦ヒ其事ハ明白ニハ述べ居ラザレ、實ハ暗々裡ニ、フエター、ギーザ、スマート等ト同様ノ誤謬ニ陥リ居レル也。而シテ主トシテメンガーヲ祖述セルギーザーガ此ノ價格論ノ誤謬ヲ匡サズシテ、却テ逆ニ這箇ノ誤謬ヲ價值論ニマデ一貫セシムルニ至リタルハ、偶々以テ祖述者改惡ノ一例ト爲スベキ也。

之ヲ要スルニ、メンガーハ、少クトモ價值論ノ條下ニ於テハ、唯ダ一定量ノ物ノ何レカ一單位ノ價值ガ限界效用ニ依ツテ定ルト云ヘルノミニテ、其ノ一定量ノ物ノ全體ノ價值ガ限界效用ニ單位數ヲ乗ジタル積ニ等シナド云ヘルコトヲ主張シタルニハ非ズ。而シテメンガート共ニ限界效用說ノ創說者ノ一人ト目セラル、ゼボンスモ亦タ、此點ニ於テハメンガート相同ジ。即チゼボンスハ價值ナル語ニ種々ノ意味アリト爲シ、之ヲ分ツテ三種トナシ、且ツ之ト效用トノ關係ヲ左ノ如ク表示セリ。(Jevons, Theory of political economy, p. 81.)

(1) Value in use = total utility;

(2) Esteem = final degree of utility;

(3) Purchasing power= ratio of exchange.

サレバ氏ノ所謂ル最終效用ニ依ツテ定ルモノハ氏ノ所謂 esteem value ニシテ、而シテ esteem value トハ或ル一物ニ對スル慾望又ハ尊重ノ烈度 (intensity of desire or esteem for a commodity) タルニ止ル。最モゼボンズノ所說ハ、茲ニ問題ト爲レル點ニ就キ、メンガーノ所說ノ如ク明白ナラズト雖モ、兎モ角、氏ガ余ノ本論ニ於イテ攻撃シツ、アルガ如キ謬說ヲバ、アカラサマニ主張シ居ルニ非ザルコトハ、氏ノ著書ニ徴シテ疑ヲ容ルベカラズ。

之ニ依ツテ考フレバ、限界效用說ハ、少クトモ如上ノ點ニ於テハ、其ノ創說者ノ曾テ主張シタルコトナキ方面ニ擴張セラレテ、遂ニ今日ノ如キ一大謬說ヲ醸スニ至リタルモノト云フベク、而シテ限界效用說ノ意味ノ取リヤウニ依リテハ、或ハ限界效用說ソノモノガ一大誤謬ヲ有スト云ヒ得ベク、或ハ又タ多數ノ學者ガ今日敢テシツ、アルガ如キ限界效用說ノ適用ハ、其ノ適用ニ於イテ一大誤謬ニ陷レルモノト云フヲ得ベシ。言葉ハ如何ニ立ツルトモ、唯ダ這箇ノ誤謬ヲ指摘シテ明白ナラシムルヲ得バ、本論ノ目的ハ則チ達セラレタル也。(明治四十四年十二月九日脱稿)

(附言) 效用遞減ノ法則ニ所謂消極效用又ハ不效用ナル觀念ノ誤謬タルコトハ、四十五年二月發行ノ「國家學會雜誌」ニ於イ

テ更ニ詳論スベシ。

物ノ價值(主觀的)ノ概念ニハ、出費價值ト充慾價值トアリテ、其ノ充慾價值ガ更ニ經濟價值ト享樂價值トニ分タルベキモノナリト云フコトハ、余ノ價值概念論ノ一部ニシテ、實ハ、本論起稿ノ當初ハ、最後ニ此事ヲ略述シテ論ヲ完ウスルノ豫定ナリシカド、未ダ茲ニ及バザルニ先チテ、本論既ニ已ニ過分ノ長篇ト爲リタレバ、今ハ到底是等ノ論ヲ試ムル能ハズ。他日モシ機會アラバ、更ニ是ガ爲メ別論ヲ草スルコトアルベシ。

猶ホ最近ノ「國家學會雜誌」(四十四年十一月發行)ニハ寺尾隆一氏ノ「全部效用ニ關スル誤謬」ト題スル一論ヲ載ス。眞面目ナル思索ノ結果ニ成レル論文ニシテ、余ハ稿者ニ向ツテ敬意ヲ有シ居ルモノナレドモ、論文ノ要旨ソノモノハ殆ド余ノ本論ニ述ベタル所ト正反對ノ立場ニ立ツモノニテ、遺憾ナガラ余ノ贊成スルヲ得ザル所ナリ。仍ツテ氏ノ此ノ論ニ向ツデモ多少ノ所見ヲ述ベント欲シタリシガ、餘白ノ乏シキ、到底之ヲ遂グルニ由ナシ。乍併、間接ニハ本論ノ殆ド全部ガ之ニ對スル批評文ト見ラレザルニモアラザルベシ。本論モシ同君ノ閱ニ入ルコトアラバ、請フラクハ君叱正ノ勞ヲ吝マレザランコトナ。

(附言ノ二) 一定量ノ物ノ全部效用ハ、之ヲ單位々々ニ分チテ秤量スル時ハ、各單位ノ效用ノ和ニ等シキモノニテ、例ヘバ一定ノ貨物一箇アル時ハ之ニ十ノ效用ヲ感ジ、二箇アル時ハ其ノ何レカノ一箇ニ對シテ九ノ效用ヲ感ズルニ過ギズト假定セバ、其ノ二箇ノ貨物ノ全部效用ハ $10+9=19$ ナリ。乍併、一定量ノ物ヲバ、此ノ如ク單位々々ニ分チテ考ヘズ、之ヲ一全(a whole)ノモノトシテ考フル時、其ノ全部效用ガ果シテ前ノ場合ト等シク依然 $10+9=19$ トナルベキヤ否ヤ、聊カ疑ハシ。一定量ノモノヲ單位々々ニ分チテ考フレバコソ、何レカ一單位ノ效用ヲ十ト爲シ、他ノ一單位ノ效用ヲ九ト爲スヲ得ルナレ。若シ此ノ二單位ノ物ヲ一全ノモノトシテ考フル場合ニ、其ノ全體ニ對スル效用ガ、果シテ十ト九ト加ヘタル十九ト云フ分量ニ恰モ一致スベキモノナルヤ否ヤ、コハ考究ヲ要スル點ナルベシ。本論ハ、前ノ場合モ後ノ場合モ、其ノ思想ノ道行ハ異レ、全部效用ヲ秤量シタル結果ソノモノハ假ニ同一ニ歸スルモノトシテ、論ヲ立テタリ。此點、所謂限界效用説ノ誤謬ヲ明カニスル爲メニハ、直接何ノ關係ナケレドモ、論思ハズ識ラズ多岐ニ馳セテ、遂ニ斯カル點ニマデ言及シタリシカド、今マ思ヒ出シテ、此點暫ク後考ヲ要スルベキ旨特ニ附記シテ以テ、猶ホ思索ノ餘地後日ニ留保シ置クモノ也。(十二月十一日附記)